

国登録有形文化財(建造物)

「旧東京市深川食堂」

(現在の深川東京モダン館です)



深川東京モダン館全景
(丸窓とスチールサッシュが特徴)



階段と踊り場
(多くのタイルが建築当初のもの)

所在地: 江東区門前仲町 1-19-15
開館時間: 10:00~18:00(金・土は 19:00 まで)
休 館: 月曜日
 (月曜が祝日の場合、翌火曜日休館)
アクセス: 都営地下鉄大江戸線、
 東京メトロ東西線
 「門前仲町」駅下車
 徒歩 3 分(3・6 番出口)
問 合 せ: 深川東京モダン館(03-5639-1776)

下町文化

NO. 274
2016.7.6

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.
lg.jp/

- 国登録有形文化財(建造物)
「旧東京市深川食堂」
(現在の深川東京モダン館)
- 江戸~明治の饅細工職人
伊豆長八
- 江東区域と寺町
~深川~
- 城東の村を歩く⑧
八右衛門新田
- 時雨忌記念講演会録
野ざらし紀行
一母の遺髪に会いにゆく旅一
- 夏休み職人の技体験
○黄綬褒章受章
友國三郎氏(三好2) 木工(建具)

国登録有形文化財を活用する

また暑い夏がやってきました。「暑^{もど}暑^{しよ}」。この言葉、聞いただけで汗が吹き出しそうですね。

さて、今回1面を飾るのは、地下鉄東西線「門前仲町」駅近くにある深川東京モダン館です。同館は、関東大震災の復興事業で建設された歴史ある建物で、昭和7年(1932)に「東京市深川食堂」として開業しました。「簡易低廉且つ栄養に富む食事を供給^{かんいていれんか}」(『東京市広報』)することを目的に、他にも市内15ヶ所に建設されました。

深川食堂は、空襲で一部が被災しましたが、その後も使用され続け、同54年に都から江東区に移管、平成18年に閉鎖になりました。しかし、2年後の同20年7月、震災復興事業の建造物として、国の登録有形文化財(建造物)になると、そのことを契機に、耐震補強、意匠^{いしょう}の修復などを行い、観光・文化の拠点「深川東京モダン館」として再生しました。国登録有形文化財(建造物)は、文化的価値を維持しつつ、緩やかな規制のもと活用を図る制度です。

戦災をくぐり抜け、現在に伝えられた87年の歴史の重みを、ぜひ体感してください。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

くさいくさい

はじめに

区)、寄木神社・善福寺
(品川区)、橋戸^{はしど}稻荷神社・

言ふおもしろく、宮へ良し、一層多田に

表 三代長八家旧蔵の初代長八作品

は外出しており、帰宅直後に過去帳2冊だけを持って逃げたものの、初代長八の作品などは持ち出せなかったそうです(『伊豆』)。このため、大震災後の発行である『罹災』および『伊豆』掲載の作品は確実に焼失したと言えます。『伊豆』には、三代長八の未亡人である入江はつが、常盤町2-6(現在の常盤2-13)に関東大震災の後に住んでいる記述があることから、大震災時に焼失した家はこの場所の可能性があります。

次に、『叢誌』20に写真が掲載されている2作品をご紹介します。自像の像高は『叢誌』20・『伊豆』では「八寸(約24cm)」、『目録』では「高一尺五寸(約45cm)」と見え、寸法に違いがあります。『伊豆』には、「晩年の作で、数珠をつまぐり、十徳姿」という注記がありますが、これに対して『叢誌』20掲載の写真(写真1)では、頭巾に十徳姿ですが、右手に扇子を持ち、左手は膝の上にのせている正座像ですので、自像は2作品あったのかもしれませんが。



写真1 伊豆長八作自像
『建築工芸叢誌』20(国立国会図書館蔵)

なみに、「自作位牌」(個人蔵、明治22年制作)の長八像は数珠を持つ十徳姿です。成田山不動尊像(写真2)は、岩坐の頂部に不動明王坐像、下方に脇侍である矜羯羅(写真右下)・制吒迦(同左下)の二童子像を配しています。矜羯羅童子は立像ですが、制吒迦童子は半跏像であり、文字通り成田山の不動明王三尊像の像容と同じであることが分ります。これは「不動明王及び二童子像」(静岡県三島市・龍澤寺蔵、明治11年制作)や「不動明王画像」(個人蔵、明治21年制作)などにも共通します。また、新勝寺(千葉県成田市)や深川不動堂(真偽は不明)の不動明王像を長八が修繕したという記述が、『叢誌』20や『伊豆』にみえます。いずれにしても、長八は不動明王を信仰していたこともあり、好んで制作していたと言えます。

旧丸山傳右衛門邸の建築装飾

前述の作品群のほか、江東区域にはごく一時期存在した長八作品がありました。それは、亀戸6丁目の堅川沿い



写真2 成田山不動尊像
『建築工芸叢誌』20(国立国会図書館蔵)

にあった材木商・丸山(信濃屋)傳右衛門邸で、書院、茶室などが建てられ際(明治12年頃)に、書院格天井の「ランプ掛け」には龍が、書院に連なる茶室の壁面には四君子(蘭・竹・梅・菊)の装飾などが初代長八によって施されていたとのこと(なお、傳右衛門邸内建築の装飾は浅草の左官・村越滄洲との共同ということですが実態は不明)。これとは別に、傳右衛門が所蔵していた初代長八作「おかめの面の額」を、グラント元米大統領に渡したとの

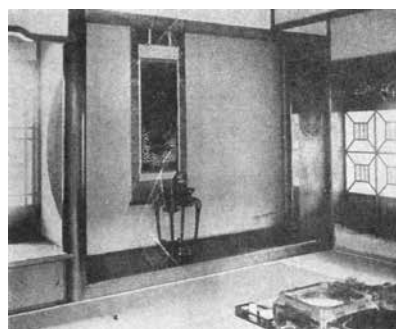


写真3 称福寺書院
『建築工芸叢誌』8(国立国会図書館蔵)

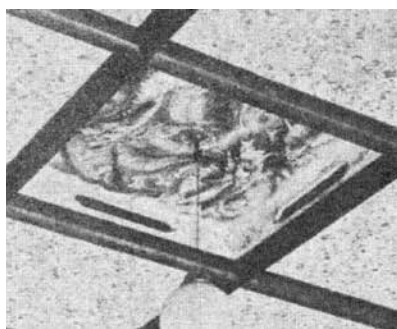


写真4 称福寺書院「ランプ掛け」(部分)
『建築工芸叢誌』8(国立国会図書館蔵)

記述が『伊豆』にみえます。ちなみに、明治15年6月9日、明治天皇が千葉への行幸の際、傳右衛門邸が「亀戸御小休所」となり、天皇が書院で休まれています(『仰ぐ聖駕のみあと』東京府、昭和15年)。

傳右衛門は明治20年までに没落し、書院は明治32年に称福寺(現在の台東区今戸2-5-4)の境内に、御殿として移築されました(同邸内にあった楼閣は明治20年に浅草花屋敷に移築され、奥山閣として浅草では凌雲閣とともに人気施設となりました)。この際、「主たる壁は崩さず」使用したようです。書院の内部については、佐々木高踏「先帝臨御の書院」(『建築工芸叢誌』第8冊、建築工芸協会、大正元年)に写真入りで紹介されています(写真3・4)。こちらの作品群も残念ながら関東大震災で焼失してしまいました。

おわりに

江東区域にあった伊豆長八の作品はもちろんのこと、多くの文化財が関東大震災によって焼失しました。江東区域は大震災のほか、戦災にも遭っており、現存している文化財は奇跡的に残ったといえます。このことは、未来に向けて文化財をいかに保護していくかが問われているように思われます。

(文化財専門員 野本賢二)

江東区域と寺町

深川

16世紀末以降、江戸は徳川家の城下町として拡張・整備され、都市として発展を遂げました。その過程で、当初江戸の中心部にあった寺社は、郊外へも移転し、移転先で寺町を形成しました。そうした地域には谷中（台東区）・四谷（新宿区）などがあり、深川もその一つです。江東区内で多くの寺院が集まる深川寺町（白河・清澄・三好・深川）は、深川地域の開発と共に形成されました。

そこで、今回はこれまでの研究成果※にもとづき、深川の寺町の発展を分けて紹介し、あわせていくつかの寺院について解説を加えます。

① 深川開発と共に創建された寺院

深川開発の頃に創建された寺院には、仙台堀川以南に元和（寛永年間（1615～44）に開創された寺院や深川獺師町から移転した寺院などがあり、寺町形成の端緒と言えます。

そのうち、陽岳寺は寛永14年（1637）に創建され、開基は、船手頭の向井忠勝（1582～1641）です。船手頭は、幕府の水軍を指揮する役割を担いました。

また、一度は獺師町に寺地を拝領しながら、短期間で移転した法乗院（深川2）と玄信寺（深川2）があります。両寺は、いずれも寛永6年（1629）に深川相川町（永代1）に建立されましたが、同18年に現在地へ移りました。この後、両寺の跡には御船手組屋敷が設置されました。御船手組屋敷は、対岸にあたる霊岸島（中央区）にも設けられていることから、隅田川河口部の重要性をうかがわれます。

② 明暦の大火（1657）以降に移転してきた寺院

続いて17世紀後半になると、仙台堀川以北に寺院が創建されます。これらには、明暦の大火以降に移ってきた寺院があり、これらの寺院には、雲光院（三好2）・本誓寺（清澄3）徳川家康の側室である英勝院が開基・靈巖寺（白河1）桑名藩主松平家をはじめとする複数の大名家の墓がある）などの將軍家や大名家との縁の深い寺院が含まれます。

その内、雲光院は慶長16年に徳川

家康の側室の一人である阿茶局が貝日本橋馬喰町（中央区）に徳川家康・秀忠父子から寺地を与えられ、開基となった寺院です。明暦3年（1657）の大火で神田岩井町（千代田区）へ、さらに天和2年（1682）にも再び火災に遭い、現在地へ移転しました。現在墓域には、阿茶局の墓塔が残されており、「石造宝篋印塔 寛永十四年在銘」の名称で、江東区指定文化財になっています。

③ 臨川寺と「一蝶寺」

臨川寺と「一蝶寺」（宜雲寺）は、文化人とのつながりが深い寺院です。臨川寺（清澄3）は、承応2年（1653）に庵室として成立し、正徳2年（1712）に四代將軍徳川家綱の三三回忌に寺院として取り立てられました。初代の仏頂禪師は深川に移り住んだ松尾芭蕉との親交が深く、芭蕉の「桃青」の号も仏頂禪師によるものと言われています。

また、元禄5年（1692）に庵室



石造宝篋印塔（阿茶局墓塔）寛永十四年在銘 雲光院

から寺院となった宜雲寺（白河2）は、英一蝶が一時居住しており、『江戸名所図会』では「一蝶寺」として紹介されています。さらに同書では、英一蝶による障壁画などを紹



本所深川絵図(部分) 江東区教育委員会蔵

介していますが、それらの絵画は関東大震災で失われたと伝えられています。以上、深川に成立した寺町について、若干の寺院も取り上げながら紹介しました。寺町といっても、そこにある寺院の成り立ちは一様ではなく、それぞれに移転・成立の契機をもっていました。

※遠藤廣昭「黄檗派江戸八カ庵の古跡並御免とその機能―深川の黄檗派寺院を事例として―」（『江東区文化財研究紀要』第一号 江東区教育委員会 1990）・『江東区史』上巻

（文化財専門員 功刀俊宏）

城東の村を歩く⑧

八右衛門新田

八右衛門新田（北砂1丁目、2丁目南部、扇橋3丁目付近）は、『新編武蔵風土記』によると、寛永年間（1624～1644）に足立郡大門宿（現埼玉県さいたま市）の百姓源左衛門の子どもの八右衛門がこの地にやってきて開発し、その名をとって八右衛門新田と名付けられたとされます。八右衛門の子孫はその後も代々、村の名主を務めました。砂村地域の新田村のなかでは比較的早い時期に開発された村であると同時に、最も西側にある村の一つで、深川地域との境界に位置しています。

深川稲荷から志演稲荷へ

八右衛門新田が深川に近かったことは、村の鎮守である志演稲荷（現志演尊空神社、北砂2-1-37）がもともと「深川稲荷」という名称だったことにもあらわれています。

「深川稲荷」の名は、境内にある江東区登録有形文化財（歴史資料）「燈籠（残欠）織田長好奉納 一對」（図1）に刻銘があり、燈籠が寄進された正保4年（1647）には、志演稲荷が「深川稲荷」と称されていたことを伝えています。



図1 織田長好奉納の燈籠（残欠）

また、江戸時代の神社は一般的に別当寺という寺院によって管理・運営されていましたが、志演稲荷の別当寺は深川富川町の利益院という寺院でした。

しかし、社伝によると深川稲荷は5代將軍徳川綱吉が参詣した際に志演稲荷と改名されました。さらに、『東都歳事記』によると享保年間（1716～1736）に8代將軍吉宗が鷹狩りの途中で立ち寄り、吉宗の命によって五穀豊穡を祈願する柴灯護摩修行が執行されたという、徳川將軍ゆかりの神社でもあります。

八右衛門新田の人々の信仰

志演尊空神社には、昔の人々の祈りと願いが込められた伝承や文化財も残されています。

この地では、正徳2年（1712）に、多数の死者が出る伝染病が流行したそうです。しかし、当時の5代別当・菅原快圓が柴灯大護摩を焚いたところ、病が治まったので、人び

とは「ごまの稲荷」と呼んで崇敬を集めたといえます。

また、境内には5基の庚申塔が残されており、江東区の有形民俗文化財となっています（庚申信仰については『下町文化』266号参照）。

中でも延宝8年（1680）と元禄6年（1693）の二つの庚申塔（いずれも区登録有形民俗文化財）には、寄進者として八右衛門新田の村人の名が刻まれており、村の人々の信仰のあり方をうかがうことができます。特に延宝8年の庚申塔には、寄進者の名前として「中嶋八右衛門」の文字がみられます。その名の通り、この人物が代々名主を務めたという八右衛門新田の開発者の家系である可能性があり興味深いです。

江戸・深川との境界

地理的に深川に近いことは、のちの村の成り立ちにも影響を与えます。村の西方には「深川扇橋町」という深川の町がありました。砂村が農村地域だったといっても、深川から街並みが続いている以上、突然町がぶつ切り途切れるわけではありません。「西葛西領八右衛門新田図」（図2）という絵図をみると、行徳川（小名木川）沿いには百姓以外にも町人や武家が土地を

所有していたことがわかります。おそらく、この辺りは屋敷地として利用されていたと考えられ、八右衛門新田が単なる農村ではなくなっていたことが

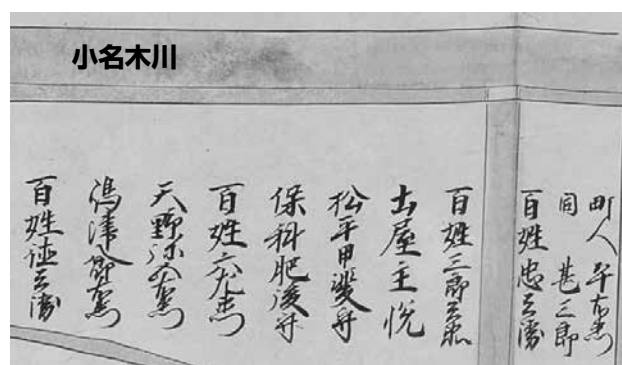


図2 西葛西領八右衛門新田図（部分、17世紀後半、江東区教育委員会蔵） 絵図の上部を東西に流れているのが小名木川。南岸に武家地・町人地・百姓地が並ぶ。

わかります。

また、八右衛門新田内にも「源左衛門屋敷」という場所がありました。こは村の中でありながら、町並みがあったことから、延享4年（1747）には江戸町奉行の支配地となっています。このように八右衛門新田は、まさに町と村の両方の景観がある江戸・深川との「境界の村」ということができます。これは江戸時代の江東区域の特徴をよく表しているといえるでしょう。

（文化財専門員 斉藤照徳）

野ざらし紀行

―母の遺髪に会いにゆく旅―

講師 井上弘美(「江」主宰)

1、『野ざらし紀行』の面白さ

『野ざらし紀行』は面白い作品なのですが、芭蕉の作品の中ではあまり高く評価されていません。なぜなら、芭蕉の最初の旅で完成度が低く、作品全体的に統一感がない、というのがその理由です。しかし、この旅を「母の遺髪に会いにゆく旅」という視点で読むと、大変面白いのです。

芭蕉が『野ざらし紀行』の旅に出たのは四十一歳、亡くなるのが五十一歳ですから、芭蕉を「芭蕉」たらしめた仕事というのは十年間で成し遂げられたということ。その最初の旅が『野ざらし紀行』です。この頃の芭蕉は三都トップクラスの点者十八名の一人として評価を受けています。しかし、江戸の大火によって、一時甲斐に寄寓。その年の六月二十日に母が亡くなりませんが、ようやく、母の菩提を弔う旅に出ることができたのは、貞享元年八月でした。

旅は八月に出発して、翌年の四月に終了するのですが、この旅の目的は三



つありました。

第一に、母の菩提を弔う。第二に、俳諧隆盛期にあつて、地方俳壇の開拓を目指した。第三に、旅に出ることで俳諧の新境地を開こうとした。この第三がもっとも重要なのですが、実際、芭蕉は大きな収穫を得て帰ってきました。

さて、ここからは作品に即して見てゆきます。まず、作品全体を見ると、

前半部には長い前書がたくさん付されていて重厚な感じ。それに対して後半部は前書きが短く少なく、軽快な感じ。この前半部の中心に「母の遺髪に会う」場面があるのです。実際、前半部は陰々滅滅たる暗いイメージ。後半部は「やま路来て」にやらかしすみれ草」に代表されるような、明るい作品が収められています。『野ざらし紀行』は明暗が一对になった作品なのです。

当時は、俳句の価値観の転換期にきていました。『野ざらし紀行』の俳句の多くは、故実、来歴、漢詩、漢文の知識教養に裏付けされた句です。しかし、「やま路来て」の句は、眼前の景に徹して詠んだ句で、一句の背景に知識や教養を必要としない詩です。蕁のような小さな床しい存在に心を惹かれて芭蕉は実に清純。こういう句に開眼してゆくのの後半部なのです。

さて、これから話すのは、漢詩などに影響されていた芭蕉が、『野ざらし紀行』の前半部を完成させていったというお話です。以下、前半・後半という言葉は前半部におけるものです。

2 文学に生きる覚悟

〈出立〉

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十年かへつて江戸をさす故郷

前句は旅立ちの第一句。「野ざらし」になることを覚悟しての旅立ちに秋風が身にしむ、と詠んでいます。実は「野ざらし紀行」の前半は秋風が始まり、秋風で終わるという構成になっています。また、後句では、江戸で十年を過ごした今となつては、これから目指す故郷より、江戸のほうが故郷に思われると詠んでいます。しかし、芭蕉にとって江戸は故郷ではありません。芭蕉は故郷喪失者なのです。この故郷喪失者としての自覚が、次なる芭蕉を開いていくのではないかと思うのです。

〈富士川の捨て子〉

猿を聞く人捨て子に秋の風いかに

富士川のはとりで、芭蕉は捨て子に会います。しかし、その捨て子に対して、捨て子になってしまったのは運命だからどうすることもできない、その運命を受け入れて泣くしかないんだ。というような内容のことを書いています。わずかに、持っていた食べ物を与えて、芭蕉はその場を去るのです。実に非情です。「猿を聞く人」とは、猿の啼き声を悲しいものと思つて聞く伝統を持った、中国の詩人たちのことです。猿の啼き声を哀しいというが、捨てられた赤子の哀しげな泣き声、そこに吹いてくる秋風、そういうものをあ

なたたちはなんと聞きますか、と中国の詩人たちに語りかけているのです。しかし、これは自分への問いかけでもあります。芭蕉は、こういう現実に対して、文学以外に生きる道のない、非力な自己を思い知らされ、その自覚の上に文学を打ち立ててゆくのです。

3 母の遺髪

〈伊賀上野〉

長月の初め、故郷に帰りて、北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡だになし。何事も昔に替はりて、同胞の鬢皺寄りて、ただ「命ありて」とのみ言ひて言葉はなきに、兄の守袋をほどこきて、「母の白髪拌めよ、浦島の

子が玉手箱、汝が眉もやや老いたり」と、しばらく泣きて、

手に取らば消えん涙や熱き秋の霜

長月の初めに伊賀上野に帰り着きますが、このときは父も母も亡くなっています。兄の松尾半兵衛が非常にいい理解者で、折に触れて芭蕉を援助をしています。

ここに登場するのは半兵衛と芭蕉、

その真ん中に母の遺髪があるという構成です。何もかも昔とは変わってしまった中で、ともかく命があつて会うことが出来た、と二人は言葉もありません。その時、兄が守袋を出して、「これが玉手箱だ」と言つて開くのですが、それを見た時に芭蕉は手に取ることも出来ない、手に取ったら秋の霜のように、白髪になった老いた母の遺髪が消えてなくなりそうだと号泣しています。慟哭の場面です。兄の鬢は白く、芭蕉の眉も白く、母の遺髪も白く。母から受け継いだ血と、ともに過ごすことの出来なかつた歳月を巧みに表現しています。

4 浦島伝説

浦島伝説はよく知られていますが、これは『日本書紀』や『万葉集』、そして『御伽草子』に登場します。話の内容は少しずつ違うのですが、共通点が一つあります。それは、浦島が故郷

に戻るのは父と母に会うためだという点です。『万葉集』では仙境、つまり竜宮城に居た年月は三年だと思っていました。それで三十日間故郷に帰ることにしたのですが、仙境と人界では全く違う時間が流れていたのです。芭蕉が江戸で過ごした十年という歳月と、故郷の歳月は別の時間だったのです。だから、兄が「玉手箱」を開けるように（守袋を）開けた時、芭蕉はそこにある母の遺髪に触れることすら出来なかつたのです。

5、まとめ

『野ざらし紀行』は母の遺髪を詠んだ句を中心に、前半には露しぐれの箱根の関所越えや、雨で渡れない大井川、そして捨て子など、暗く重いテーマが捉えられています。そして、後半では塚や廟を巡りつつ、母の霊を弔う芭蕉の姿を読み取ることができます。

このように『野ざらし紀行』を読んでききますと、結局、この『野ざらし紀行』の前半部の旅というのは、芭蕉にとつては、「母の遺髪」が象徴する、故郷との決別の旅であつたということが出来ます。その決別によって、芭蕉は次なる自分に旅立っていく、と読めるのではないかと思います。「浦島の子が玉手箱」はその決意を促すものであり、故郷喪失の象徴です。



旅立ちの時に、心にしみるように聞いていた「秋の風」は、富士川の捨て子に吹き、後半では、敗残の武将義朝にも、荒廃した不破の関にも吹いています。「秋の風」もまた一対になっているのです。見事な構成といえるのではないのでしょうか。

『野ざらし紀行』のあと、芭蕉が過す十年の歳月。旅人として、風狂に生きる覚悟の出発点の作品としては、実に上手くまとめられていると思います。母の死を契機として、新たな自己へ出発していく芭蕉という読みも、不可能ではないと思つていただければ幸いです。

平成二十七年十月十一日（日）

於…江東区芭蕉記念館

夏休み職人の技体験

8月20日(土)

江戸時代より続く伝統工芸の技が体験できます。職人さんのていねいな指導のもとで、江戸の職人気分を味わってみませんか。

会場：森下文化センター2階工匠館

(江東区森下3-12-17)

時間：①午前10時、②午後1時

講師：江東区無形文化財保持者

申込：7月26日(火)から電話にて文化財

係までお申込みください(申込

順、☎3647-9819)。

締切：定員になりしだい。

費用：教材費がかかります。

【指物】銘木・寄木筆立



講師：山田 一彦

材料：トチなど

寸法：幅6cm×高15cm

定員：午前午後各5人

費用：2,800円 時間：2時間程

【簾】色紙掛け



講師：豊田 勇

材料：セイタカアワダチソウ

寸法：横35cm×縦41cm

定員：午前午後各4人

費用：500円 時間：1時間程

【鍛金】銀ペンダントトップ



講師：佐生 明義

材料：銀

寸法：約3cm×2cm

定員：午前午後各5人

費用：3,000円 時間：1時間程

【無地染】しぼり染め



講師：近藤 良治

①手ぬぐい ②ハンカチ

材料：①木綿 ②正絹

寸法：①約1m×30cm、②約40cm四方

定員：午前①のみ9人、午後②のみ6人

費用：①1,500円 ②1,000円

時間：2時間程

【更紗染】東海道五十三次額絵



講師：佐野利夫・勇二

材料：正絹

寸法：縦30cm×横29cm

定員：午前午後各6人

費用：2,500円 時間：2時間

【表具】一閑張の器



講師：岩崎 晃

材料：和紙、竹ざる

寸法：材料による

定員：午前午後各10人

費用：1,000円(小中学生500円)

時間：40分～2時間

【江戸切子】カットガラス



講師：小林 淑郎

①左・小皿 ②右・ペーパーウエイト

定員：午前①10人 ②20人

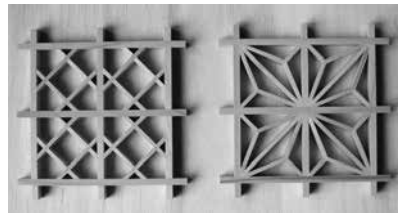
午後①10人 ②20人

費用：①1,000円 ②500円

時間：①1時間 ②30分

寸法：①直径15cm ②直径8cm

【建具】組子細工コースター



講師：友國 三郎

①左・枳つなぎ ②右・麻の葉

材料：檜 寸法：10cm四方

定員：午前午後とも無し

費用：①1,000円 ②1,500円

時間：20分程

【指物】小箱



講師：山田 一彦

①小箱(大) ②小箱(小)

材料：杉・桐 時間：2時間程

寸法：①長25cm ②長16cm

※幅4.5cm×高4cmは共通

定員：午前①②各5人、午後①②各5人

費用：①1,800円(小中学生1,500円)

②1,500円(小中学生1,000円)

※いずれの体験も、汚れてもよい軽作業のできる服装でご参加ください。

黄綬褒章受章

友國三郎氏(三好2)

木工(建具)

区登録無形文化財(工芸技術)保持者の友國三郎氏は、平成28年春の褒賞にて黄綬褒章を受章されました。

友國氏は、昭和40年に建具技術の修業を始め、62年に三好2丁目に友國建具店を創立して以降、永年にわたり仕事をされています。

氏は、伝通院(文京区)の本堂新築工事、明治丸修復などに携わり、その後は今半別館(台東区)の建具修復、浜離宮(中央区)に復元された松の御茶屋の建具製作にも参加しています。氏の優れた技量は、平成22年に卓越した技能者(現代の名工)として表彰されています。

また、平成8年から現在にいたるまで東京建具高等職業訓練校の講師として後進の指導にも努めておられます。今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

